

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	いれずみ大臣 : 小泉又次郎逋信大臣 (いれずみ物語 ; 20)
Author(s)	小野, 友道
Citation	大塚薬報 = Otsukayakuho, 20: 33-35
Issue date	2007-12-10
Type	Journal Article
URL	http://hdl.handle.net/2298/6273
Right	



いれずみ物語

— 20 —

小野 友道

いれずみ大臣 — 小泉又次郎通信大臣 —

濱口雄幸内閣、そして第2次若槻禮次郎内閣で通信大臣をつとめた小泉又次郎は、昇り龍を背負っていたという。人呼んで「いれずみ大臣」。

昭和3年に発生した張作霖事件などの責任をとって田中義一が首相を辞した。昭和4年7月、その後を襲って首相に任命されたのがライオンとあだ名された濱口雄幸であった。このライオンが、昇り龍を通信大臣に任命した。

城山三郎の『男子の本懐』には、「野人に名誉は要らん。おれは大臣などにはならん。今度の内閣はよほどうまくやってくれんと困る。だから、おれは大久保彦左衛門になって、悪いことでもあったら、すぐねじこんでやる。もう年寄りだから、いくら憎まれても、いいからな」と又次郎は新聞記者に啖呵を切っていた。おまけに貴族院からの渡辺千冬子爵、そして貴族院の勅撰議員で、日銀出身の井上準之助も大蔵大臣という話をきいて、貴族院から選ぶのは「約束違反ではないか。遺憾千万だ。自分は入閣を辞退する」と頑張ったが、1時間に及ぶライオンの口説きに、龍が伏した。「どうも仕様がなくて、大臣にされてしまった。野人の歴史をけがして残念だが、山王台のように、どなればかりも居られねえからな」と言った。城山

は続いて、「この又さん大臣、参内するにしても、御車寄せの位置がわからないからと、内務大臣安達謙蔵の邸まで行き、そこから安達の車に同乗して宮中へ入ったが、だれも大臣と思わず、安達の従者として扱われる有様であった」と記している。そして「又さん大臣こと小泉又次郎は、友人から借りたモーニング姿で、通信省大臣室へ」赴き、前大臣久原房之助と引き継ぎをした。愛すべき庶民大臣ではあった。

＊

小泉又次郎は慶応元年（1865）、武蔵野国久良岐郡六浦莊村大道（現在の横浜市金沢区大道）に生を享けた。父由兵衛とはび職で、のちに港湾の請負業「小泉組」を仕切った。

とび職は高い足場で仕事をする者を指すが、古くは「鳶口の者」と言い、「鳶口でこの者」とも呼ばれていた。玉林晴朗の『文身百姿』に「普請の場所其他で大木大石などを引動かす人足であって、木石を曳くに木積を用ひるのでてこの者」と云ひ、又鳶口を打立てて曳く事もあるのでて鳶口の者とも云われた」とあり、寛文のころから鳶口の者を略して「鳶の者」となったという。ちなみに鳶口とは、棒の端にトビの嘴のような鉄の鉤をつけたものである。人足がものを引っ掛けて運んだり、壊したりする道具



小泉又次郎の肖像（宝樹院所蔵）

である。また火消したちは厚い布の半纏をまとい、水をかぶって火の粉を防ぎ、「鳶口」などを用いて家を壊し、延焼を防いだのである。このような危険な作業は一般町民では無理で、おのずと鳶の者が火消し人足の専門家となっていた。享保のころには「いろは組合」ができた。「いろは48組」でなじみ深いが、火消しに具合の悪い「ひ」、それにイメージの悪い「へ」「ん」は抜いてある。その代わりに、「百の組」「千の組」、そして「万の組」が入り、48組である。一組100から200名の組織である。「明和安永と云ふ頃になると、もう勇み肌なものとなってきた。其の鳶の者は纏楷子を持って行くのを道具と云って最もよく其の中でも纏持は名誉の役柄であった。…そしてこれらの鳶の者は町役人や頭取の指導を受けて刺子半纏に猫頭巾を被り景気よく繰り出して行く。…ガエンの様に初めから裸で火がかりはしないが直接防火に当る者以外は矢張り裸になりたがる者が多い。平生仕事をしている時でも又喧嘩などの折は勿論のこと、鳶の者は直ぐ裸になる。その裸になった時勇ましい文身でもない事には幅が利かない。」というわけで、ほとんどの鳶の者の背中にはいれずみが躍った。『守貞謾稿』にも「鳶の者の云う庸夫は万をもって数ふべし。しかも

彫物なきははなはだまれとす。ある鳶の者の黥に、年老ひて笑（わ）れ草と思へどもほらねばならぬ鳶の附合、と狂歌を黥したるあり」とあるほどである。勢いいれずみは盛んになり、「昔の黥は友人各互ひこれを製す。今はこれを業とする者あり、故にその術熟練して、その黥もはなはだ精美なり」とある。そして極めつけは、文化8年からの文身の禁止令があるにもかかわらず、「將軍家斎公が、鳶人足のほり物を見たまへり。各裸体地に伏して首を隠し、將軍席上よりこれを見たまへり」と相成った。これではますますいれずみが隆盛となること火を見るも明らかであった。

＊

このような鳶の者を父に持った又次郎であるが、横須賀育ちで、海軍士官に憧れた。親に無断で海軍士官学校予備校に入学するが、兄が亡くなったこともあり、「小泉組」を継げというわけで、家に連れ戻される。あきらめきれない又次郎は、上京して今度は陸軍士官学校予備校へ入学する。また父に戻され、ついに又次郎は「軍人をあきらめたるわい」と「昇り龍」を彫ったという。いれずみがあれば、もう軍人にはなれない。ところが、ある日、板垣退助の演説をきき、またぞろ血がわき肉が躍ったらしく、

今度は政治家を志すことになったのである。もちろん、背中はいれずみはそのままである。

又次郎のいれずみは、背中から二の腕、足首まで彫ってあり、佐野真一の『小泉純一郎―血脈の王朝』に、それは「九門竜だったともく水滸伝」の魯智深、すなわち花和尚だったともいわれる」とあるが、「夏は半袖を着るものの、二の腕を人前にさらすことは絶対になかった」ので、その詳細は謎である。純一郎の母親芳江の生みの母ハツの娘、すなわち芳江の異父姉妹に当たる竹田綾子さんも、お互いに知らない間柄であったが、「又次郎さんの背中に入れ墨があったのは、母から聞いて知っています。風呂で背中を流すのは母だけの仕事だったそうです。母はよく、又次郎さんはとても恰幅のいい人だった、と言っていました」と佐野に語っている。昭和14年から2年間、西大久保の家に女中として奉公した女性が、「大先生は私たち女中に絶対流させませんでした。背中を流すのは娘の芳江さんだけでした」と述べている。優しく、きつぽのいい性格で、又次郎は勤続年数38年の議員生活を全うし、横須賀市長もつとめた。又次郎、養嗣の純也、孫純一郎と三代大臣をつとめあげている家系に見られる、勇み肌の威勢のいいきつぽは、まさに血脈である。

*

『刺青殺人事件』でデビューした高木彬光は、二代目彫宇之の仕事場に通り、無口の老刺青師から刺青に関する話を毎日少しずつ聴き出した。そして書き上げたのが『羽衣の女』である。その中に、彫宇之に羽衣を彫ってもらった女こと、お小夜が「こんな刺青をされちゃ、どんなにこっちがあがいても、明るみには浮かび上がれっこないじゃあないか。こんな女にいったい誰がしてくれたんだい？」と彫宇之に詰め寄る場面がある。これに対し、彫宇之は「それはこっちも商売だとはいいながら、人の体に傷をつけてその日その日を過ごすなんて、罪だと思わねえこともねえ…、ただ、それとこれとは話が別だ。遠山の金さんの話はいまあさら持ち出さねえが、おれが背中をつけてあげたお客でも、代議士から大臣にまで、出世してくれたお方もあり、りっぱな会社の社長の奥さんになっている人もある…、裸の世界と着物を着ての世界は

ぜんぜん別なもんだ。その使いわけができねえようじゃあ、人間の道は立たねえだろう。小説や講談にあるように、おさえつけたり、薬を飲ませたりして、こっちの仕事はできたもんじゃねえ。自分で覚悟をきめて、やって来たはずなのに、後からこっちを恨むのは、それこそ外道の逆恨みというものだ」と啖呵を切っている。

えっ、彫宇之が彫った中に、大臣にまで出世したお方がいる？ それはおそらく又次郎において他はないではないか。又次郎は慶応元年（1865）生まれ、彫宇之は天保14年（1843）神田生まれである。彫宇之は姫路、大阪、そして静岡でいれずみを彫っていたが、その彫宇之が静岡から横須賀まで出張して、又次郎の背中を彫ったと、玉林は述べる一方で、又次郎が14、5歳の折に、出世を祈願し、自分で彫ったので、ごく小さいともいわれている、とも記載している。

いれずみの事情に詳しい高木が、『羽衣の女』の中で語らせた彫宇之の台詞は、小説の中の話ではあるが、二代目からつぶさに取材した真実に近いものに違いない。横須賀で、彫宇之が又次郎の背中に腕を振るったと考えたい。ちなみに、『羽衣の女』のヒロインお小夜も実在の女であった。

*

政治家の皮膚にいれずみがあるというのは、外国ではそれほど不思議ではない。例えば、ヤルタ会談の主役の3人、チャーチルの左腕には錨、スターリンの胸には髑髏が躍り、そしてルーズベルトにもいれずみがあったという。トルーマン、ケネディにもそれは見られたという。しかし、彼らのいれずみは、海軍時代の兵隊の慣習みたいなものだったりで、又次郎の覚悟のそれとは、その動機全く趣を異にする。又次郎の彫り物は、まさに日本の秘匿のいれずみ、覚悟のいれずみだったのである。

（熊本保健科学大学・学長）

文献

喜田川守貞（校訂者：宇佐美英機）：『近世風俗志（守貞謄稿）（二）』、岩波書店、1997。

佐野真一：『小泉純一郎―血脈の王朝』、文藝春秋、2004。

城山三郎：『男の本懐』、新潮社、2002。

高木彬光：『羽衣の女』、角川文庫、1978。

玉林晴朗：『文身百姿』、文川堂書房、1936。

港 千尋：『考える皮膚 触覚文化論』、青土社、1993。